媒体名	スポーツニッポン福島版	版／面	第　版／　18 面	掲載日	2026 年 2 月 4 日（水）

東日本大震災から15年―「福島とともに」製作で世界に情報発信

神田外語大 日英新聞で 震災忘れない

神田外語大（千葉市）の学生がこのほど県庁を訪問した。神田外語グループは23年9月に福島県と包括連携協定を締結しており、東日本大震災と原発事故から15年となる本県を取材。日英版復興新聞「福島とともに」を製作し、内堀雅雄知事に贈呈した。表が日本語版、裏が英語版となっており、海外へも情報を伝えていく。

県庁訪問

災害実態を取材

「震災復興発信プロジェクト」として、この新聞作りにチャレンジしたのは同大の柴田眞一特任教授（66）のゼミ生の3年生19人。昨年8月に2日間、フィールドワークとして9人が浜通り地区を訪問した。

初日には東日本大震災・原子力災害伝承館で災害の実態を取材した。風評被害など当時の混乱した様子も学びながら、ゼミ長の関口椋久さん（3年）は「現地の方は前を向いていらっしゃった」と感銘を受けた。

2日目は3班に分かれて浪江町の福島国際研究教育機構（F-REI）、トロピカルフルーツミュージアム（広野町）、ふくしま12市町村移住支援センター（富岡町）など「イノベーション・コースト構想」、「特産品」、「人口拡大・地域振興」をテーマに取材した。

英字製作に苦戦

新聞製作には約1カ月かかり、福島民報社の協力で5000部が印刷された。英字版のリーダーだった長田紬さん（3年）は「アルファベットで使える文字数が変わって苦労したり、自分が知っている単語で伝えようと試みた」と取り組みについて語った。柴田教授は「地元の方の思いを言語化する、どうやったら伝わるのか、知恵を絞った」と活動を振り返った。

内堀知事は会見で「いろいろな出身地の学生さんが、福島のことを人ごとでなく、我がことにするのは難しい。このプロジェクトで一緒の思いを共有してくれたことに感動しています」と謝意を述べた。

関口椋ゼミ長は本県での取材を通じて「この情報を次の世代に、国内外に届けられたら」と未来に思いを届ける。（大塚　徹）

「日英版復興新聞」の英語版

「日英版復興新聞」を手に記念撮影をする内堀知事（前列左から4人目）と神田外語大の生徒ら（撮影・大塚　徹）

バナナ味地ビールも 綺麗ALE

この日の贈呈式では、広野町産のバナナをフレーバーとした地ビールも知事にプレゼントされた。ビール製作リーダーの関口舞矢さん（3年）はバナナの愛称「実りと願いから生まれた」と完成を喜んだ。ラベルのQRコードからは新聞を読むことができる。

※無断で複製・転載することを禁じます
2026 年 2 月 4 日付スポーツニッポン福島版